

## 『母をたずねて三千里』

明星学園 宮下 智

Y男さんは、今から十四～五年前、両親が離婚したその時、母親から「もうこれからは、連絡をとらないで欲しい」と言われ、彼は兄と一緒に父親側に引き取られ、妹は母親側に引き取られた。

その後、すぐに事故で父親が亡くなり、彼には、面会や帰省が無くなった。おそらくその別離が彼を追い込んだのだろう、彼は精神の変調をきたし、精神病院に一年間入院することになる。

ニコニコ笑いながら、童謡を口ずさみ、廊下を行き来する姿が無くなり、些細なスケジュールの変更や突然の外来者の来園等をきっかけにして、窓ガラスを割り、弄便をした。彼はガラスを割るとき、頭や腕を突っ込み、割れた後それを戻すので、常にざっくりと顔や腕を切った。合計十針以上も縫うような大けがをしたこともあった。

四月には、よくガラスが割れた。ひょうひょうと日常を送り、特に特定の職員に愛着を示すことが無い彼に、三月の担任の退職が大きな痛手になっているとは考えにくかったが、彼の居室に元担任の写真を大きく貼った後、彼は平穏を取り戻していた。今から思えば、元の担任の顔は、母親似のぽっちゃり輪郭、くりくり瞳系だった。

まだ覚えてたのTEACHプログラムの視覚的情報提供の手法が彼に適用された。ヨチヨチ歩きの頼りない実践だったが、彼の「突然の状況の変化、特に人間の出入りの変化」に対する弱さを補ってくれた。これも今から思えばなのだが、「突然の人間関係の変化」は、それまでの彼に訪れた施設入所、両親の離婚、母親との別離、父親の死亡というような「突然」の状況の変化が、日常生活においてさえも、心の痛みをともなって、再現されていた姿だったのだ。

弄便が続く中で、職員は彼のイヤのサインを発見した。「睡眠薬、安定剤の服薬がイヤ」「お便所に付き添われるのがイヤ」「野菜食べるのがイヤ」たくさんのイヤを、そのく口の周りを手でなでるサインで彼は職員に教え、自分らしい人生を歩み始めることができるようになった。

そして、七夕の彦星と織姫のように、一年に一回の兄との面会を心の支えに、彼には一定の平和が訪れて初めていた。

それが、およそ六年前のこと…。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼の所属するクラスでは、M男さんの亡き母親への支援が始まっていた。0才の時に、母親を白血病で亡くしている彼なのだが、その母親への思いは二十五才の今日まで、深く心の奥に沈澱していたのだろう。思い出そうとすれば、逆に余計に辛くなるが故に、心の底に押し込められた母親との思い出を、彼はもう一度手に入れたいと、職員集団に伝えたのだった。

祖母宅の古いアルバムからは、幼子の彼を抱く母親の写真が見つかった。祖母も思い出すのが辛くて、押し入れの奥にしまい込んでいたものだった。

弟のアパートからは、思い出のDVDが出てきた。遠く離れた首都圏の町から、ダビングされたDVDが郵送されて来た。(兄思いの良い奴なのだ)

彼は毎日のように、その映像を見つめ、そしてポケットに入れられた母親の写真をズボンの上から、そっと握った。

次の帰省の機会には、父親と一緒に、母宛にと書いた手紙(彼意思を確認しながら職員が代筆したもの)を携えて、お墓参りに行くことを約束した。

そして、その支援の進行の一部始終をじっと見ていたのは、Y男さんだった。求めれば、「母親に会えるんだ」と…。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

平成二十二年二月、彼は他のメンバーの方が、家庭へ電話する姿を見て、弄便や失尿やガラスへの頭突きを頻繁に繰り返すようになった。担任が他のメンバーと係わっていると、今までそんな姿は見せたことも無かったのに、羨ましそうな視線で、じっと眺めていることが多くなった。また、担任の姿が突然見えなくなると、真っ裸になって失尿する姿があった。

そのいずれもが、母親との再会の希望を暗示していた。

彼は、混乱の最中、職員の「お母さんに会いたくなっちゃったねえ。Ｙ男さんが望むなら、職員は応援するよ。お母さんどこにいるか捜してみようか？」という問いかけに、〈♪まいごのまいごの子猫ちゃん♪あなたのお家はどこですか♪〉と歌いだすではないか。そして、お母さんに会いたい？会いたくない？の質問に、○×カードを使って、しっかり〈会いたい〉と答えることができた。

彼の困難に立ち向かおうとする勇気と固い決心を受けて、僕らの支援もこれでスタートだ。親戚初め、今母親の所在を確認できる情報は何もなく、生きているか、死んでいるかもわからない状態での母親捜しだったが、とにかく僕らのチャレンジはスタートした。

保護者代わりに伯父に電話をして、母親ともう一度関係を取り戻したいことについて、了解を頂く。兄に電話をして、やっぱり寂しくなってしまうと、母親と会いたい気持ちがどうしても大きくなくなってしまったことについて、承認をもらう。

それを受けて、市役所戸籍係に所在の調査を依頼する。出身地の警察に捜索を依頼する方法を尋ねる。市役所の福祉課にＹ男さんの事情を話して、特別老人ホームの入居者の調査を依頼する。

待つこと、三日、ついに市内の特別養護老人ホームに入居していることが判明、車椅子こそ使用しているが、まだ、立ったり座ったりは十分でき、面会が可能であることがわかった。

寮母さんが母親の再会の意思を確認して下さると、母親はしっかりと「Ｙ男は今どうしているか？会いたい」と答えてくれたそうだ。

その日のうちに、母親とも電話で直接話ができる。Ｙ男さんは、母親の「元気か？お母さんも元気だよ？」の声に、ニコニコしている。

面会日が十日後に決まった。

面会日が決まった後、彼はよく〈ぶらんこ〉の唄を歌った。♪ぶらんこゆれて おそらがゆれる♪、それに職員は答える。「お母さんに、会うべきか会わないべきか、迷っちゃうよね。十五年ぶりだものね。前は、会っちゃいけないって言われちゃったしね。だから気持ちが揺れるよね。でもきつとお母さん、楽しみに待っていてくれるよ」と。

すると彼は、今度は〈ぞうさん〉の唄だ。♪ぞうさん、ぞうさん、だあれが すきな の あのね かあさんが すきな のよ♪、と。

もうこうなれば、職員とのコミュニケーションはバッチリだ。彼は自分の気持ちを一生懸命伝えようとしている。今までになかったことだ。言葉を上手に繰れない彼だが、「唄の歌詞」をコミュニケーションチャンネルに堂々としたやり取りだ。

ぞうさんの唄には、職員はこう答える。「ずっとずっとお母さんのこと好きだったんだよね。忘れていなかったんだよね。」と。

すると彼、今度は〈さっちゃん〉だ。♪ぼくのこと 忘れてしまうだろ 寂しいな さっちゃん♪、これにはこう答える。「お母さん、絶対Ｙ男さんのこと忘れてなかったと思うな。いつでも心のどこかで、Ｙ男さんのこと考えていたと思うな」

すると、今度は〈やぎさんゆうびん〉だ。ここまでくれば、もうコミュニケーションの天才です。♪しろやぎさんから お手紙ついた♪、職員はこう答えるしかありません。「お母さんに会いに行くとき、お手紙持っていこうね。Ｙ男さん、上手にしゃべることができないから、お母さんに気持ちを伝えるのに、手紙がいるよね。」と。

さあ、今度は職員と共同作業で手紙書きだ。彼は童謡のビデオテープを上手に早送り、早戻ししながら、その時の気持ちにピッタリの曲を選び出す。

まずは、〈もしも明日が〉、♪愛する人よ そばにいて♪、手紙には、ずっとお母さんのそばにいたかったんです、と書かれる。すると次の選曲は〈ことりのうた〉、♪ことりは とっても うたが好き かあさん呼ぶのも うたで呼ぶ♪だ。もう涙がこぼれちゃうよね。言葉がしゃべれない彼は、自分が唄でしか気持ちを伝えられないことを十分に承知しているのだ……。

きっと新しい幸福が、これから待っている。いや、そうに違いない。

**WELCOME TO SATORU WORLD**

**知的障害入所施設明星学園における心のケア**

**<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>**